＊阿　波　踊　徳島県

豊臣秀吉の四国征伐の結果，蜂須賀家政は阿波国を領有することになった。天正13年（1585）初代藩主として入国し，居城と定めた徳島（謂ノ津）城を修築したのが天正15年（1887）7月にしゅん工した。そこで盆の15日に落成の祝賀宴を開いたところ，一般民衆は平和な時代を迎えたことを喜び，祝意を表して歓呼乱舞した。それが藩主の目にとまってお気に入り，以後毎年の恒例として許可せられるようになったのだといい伝えられている。

しかし，これよりも以前の三好氏が政権をにぎっていた戦国時代のころ，すでに阿波踊りが盛んに行なわれていた記録があるから，この口碑をそのまま信ずることはできないのである。

また列を作って踊る組踊りは，天保のころ（1830年代）から盛んになったといわれているが，これもすでに文化年間（1800年ごろ）相当盛んに行なわれていたという記録があるので，相当古いものと思われる。

起　　原

他国の盆踊りと同じように，この踊りは，やはりうら盆踊りから発生したものであって，念仏踊りや題目踊りなどと同じ目的のもとに行なわれたものと考えられるのであるが，さらにその根源となるものとして，仏教渡来以前から旧暦7月15日の満月の夜を期して，五穀の豊じょうを神に祈る古い農業祭祀の習俗が一種の輪踊りを伴なっていたことを想像すべきであろう。

江戸時代にも，災害，ききん，流行病あるいは禁令などによって，衰えたこともあり，興隆と衰微と繰り返してきたのであるが，明治以後も同様であった。警察は取締り上公許することなく，毎年「黙許」の形でこれを容認し，明治中期以後は風俗きょう正上おもしろくないという考えから，学校教育方面では反対論が強く，白眼視して干渉してきたために衰えた。

ただ戦勝や即位例のような国家の慶事を初め，地方的の祝賀行事の際には，必ず奨励せられてにぎわってきたのである。

それが昭和の初めから，盆踊りの復興が叫ばれてしだいに隆盛になったところ，事変と戦争のために禁止となり，一時中絶した。ところが敗戦後に至ってまた復興せられ，民主主義の波に乗り，戦後の解放感もこれを助成し，踊る人数は年とともに増加し，一方では徳島の特色を発揮する観光資源として活用せられ，宣伝の効果によって全国大衆の共鳴を得て好評を博し，すでに日本的になったのみならず，今や日本の名物として世界的に進出し，普及せられようとしているのである。

阿　波　踊ーよしこのー

（アーラ　エライヤッチャ　エライヤッチャ
ヨイヨイヨイヨイ）

阿波の殿様　蜂須賀公が
今ものこせし阿波踊

踊る阿呆に見る阿呆
同じ阿呆なら踊らにゃそん〳〵

大谷通れば石ばかり
笹山通れば笹ばかり
猪豆喰うて　ホーイ　ホイ〳〵

踊々らばしなよく踊れ
しなのよい娘を嫁にとる
ひょうたんばかりが浮きものか
わたしの心も浮いてきた
ホーラ　浮いた〳〵〳〵

鳴り物

①三味線　主要楽器で，その曲は三下りの「ヨシコノ」である。昔名古屋から移入せられたという口碑があった。明治大正のころには太棹を乙（低音），歌三味線を甲（カン高音）として合奏していたが，現在は歌三味線のほかは見られなくなっている。

②胡弓・鼓・横笛・四ツ竹　明治大正のころには，これらの弦楽器・管楽器・打楽器が打ちまじって三曲合奏的簡易管弦楽を奏していったが，現在はすでに亡びている。

③小太鼓・鉦　三味線の間に入れて拍子を統一するために用いられている。

④大太鼓　昔はほとんど用いなかったものであるが，現在では主要楽器の観を呈している。それは三味線の数が少なくなり，街路が広くなったため反響が少なくなり，大部隊が出現したので，拍子をそろえるためには，どうしても巨大な音の要求を生じ，そのための発音器として登場したものである。

⑤踊

一般に踊の型が定まる前の原始的舞踊では，一定のリズムに乗ってさえいれば，あとは自分で創作しながら自由に踊ることが多かった。外国ではタイのラムボーンという踊などがこれに属するが，日本では沖縄の「かちゃーシー舞」，奄美大島の「八月踊」，鹿児島の「三下り」，徳島の「阿波踊」の四つが自由型の同系である。この系統の踊の特徴は，男は手を下げようとどうしようと全く制約がないが，女は手を肩の高さに上げて腕と手首と指先で踊らなければならんという制約がある。これは女踊の美もさることながら，おそらく女を不浄と見て，神や優位霊魂の憑依する肩より上で招き手を主とする動作を強いた遺習であろう。この点から見ても阿波踊は，唄や曲こそ変化したが，踊はかなり古代のままを伝承していると言える。

日本FD楽の「ふる里の民踊 2」より.